

高等教育推進センター紀要「リベラル・アーツ」9号  
論文：ジャン＝ジャック・ルソーにおける政治論、化学論との間にある横断的概念について

## ジャン＝ジャック・ルソーにおける政治論、化学論との間にある横断的概念について — rapport の概念を中心として —

### La notion transversale entre la philosophie politique et la chimie chez Rousseau: le cas de la notion de « rapport »

熊本 哲也（高等教育推進センター）

#### Abrégé (Abstract)

*Les Institutions chimiques* de Rousseau, écrit dans sa jeunesse, qui n'était pas publié lors de la rédaction, se fait remarquer récemment après le long oubli. Selon Bruno Bernardi, les notions chimiques dans les *Institutions chimiques*, réapparaissent en tant que termes importants de sciences politiques dans ses écrits de la philosophie politique tel que *Du Contrat social* : ces termes nous indiquent le développement de notion métaphorique qui est propre au « corps politique ». Ici, nous allons traiter un terme « rapport », terme transversal, au moins, entre la philosophie politique et la chimie pour montrer une transversalité du terme et de la notion entre deux domaines. La notion chimique de « rapport » à l'époque de Rousseau voulait dire surtout une « affinité » entre les substances. Mais ce mot « rapport » au sens de l'affinité ne désignait pas les phénomènes précis chimiques, plutôt utilisé dans le sens vague. Car, à cette époque on ne trouvait pas encore tous les « rapports » chimiques qu'il peut y avoir, et on ne comprenait pas la vraie théorie chimique. Le mot même de « rapport » est tellement polysémique qu'il y avait une nécessité de l'utiliser pour dire sur la chimie, le dit-il Rousseau. Or, l'affinité=rapport symbolisait le paradigme scientifique (au sens de Thomas Kuhn) de l'époque « chimie-centrique » du 18<sup>e</sup> siècle où la théorie de gravité universelle de Newton était expliquée comme un phénomène d'affinité chimique, un tel Goethe écrivait un roman intitulé *Les Affinités électives* (*Die Wahlverwandtschaften*) Même longtemps après la rédaction des *Institutions chimiques*, le sens du « rapport=affinité » chimique ne reste-il pas dans des autres écrits postérieurs de Rousseau tels que *Emile*, *Du contrat social*, *La Nouvelle Héloïse*, ou d'autres. Par exemple, les « vrais rapports de choses », expressions répétées dans *Emile*, ou bien le rapport des personnes et de l'amour qui n'est que le thème de *la Nouvelle Héloïse*, tous cela n'a pas seulement un sens de « relation » plutôt statique, mais aussi un sens chimique, sens dynamique. Dans *Du Contrat social* (manuscrit Genève), le mot « rapport » veut dire proportion ou relation, non pas le sens chimique. Le sens politique de « rapport » n'est pas utilisé comme quelque chose de nouveau mixte mais plutôt comme quelque chose d'instable. Au lieu de ce « rapport » au sens politique, Rousseau a recours à un autre terme comme celui de « liaison » qui est toujours dans le vocabulaire chimique.

キーワード：ルソー、化学論、関係、社会契約、一般意志

## 1. はじめに

ジャン＝ジャック・ルソーは若い時から長い間、化学に関心を持っていたことが最近の研究で明らかになっている。ルソーは、二人の弟子のために化学に関する概説書『化学教程』*Institutions chimiques* (1747) を編集した。この書物の存在が明らかにされたのは19世紀末であり20世紀初頭にルソーの著作として出版されているのであるが、長きにわたりルソー研究者から無視されていた。それがこの十数年の間に注目を浴びるようになる。それというも、ルソーの他の主要な著作との密接な関連が指摘されるようになってきたからである。特に、ルソーの政治学や政治哲学的著作との関連でルソーの『社会契約論』などとの分野を超えた交錯があったのではとされている。この指摘を行ってきたルソー政治学の研究者ブリュノ・ベルナルディ *Bruno Bernardi* の論拠を端的に述べてみよう。『化学教程』などで説明されている化学における物質どうしの混合と凝集の対立は、ルソーの政治哲学的な著作で用いられる「協同（結合）」*association* と「政治体」*corps politique* という概念を構築するために役立ち、特に「政治体」という古い身体的メタファーによる概念を再活性化させ変形させることができた、というものである<sup>1)</sup>。つまり、当時の化学的知識を政治哲学に応用しオリジナルな政治共同体論を構築しえたという主張である。この解釈は、いわゆるルソーの「一般意志」概念の形成過程の分析にも関連していて、一言でいえば、物質の化学的合成が個別意志から一般意志への変化生成の基礎的なメタファーとなっているという解釈である。

こうした、ルソーにおける化学論からみた政治哲学の読み直しという作業は、様々な領域で著作を残しているルソー自身のコンセプトや用語どうしの間に意味論的な重複性を見ることにその解釈の起点があるといっていよう。つまり、例えば上記にあげたような *association* という語が化学的な著作においては物質どうしの「結合」という意味で用いられるのだが、政治学的文脈では「結社」や「協同」というようにむしろ人々の「結びつき」という意味で用いられている事実がある。こうした同様の語をもつコンテキストの間に何かの関連性を見出そうとするのは、ルソーの多くの著作においては必ずしも穿ちすぎた例外的な見方ではない。ジャン・スタロバンスキー *Jean Starobinski* の『透明と障害』<sup>2)</sup>を始めて、ルソーの多彩な著作群に関連性や統一性を見い出そうとする研究は多くあった。その場合、複数の分野間に横断的に用いられる語の存在は重要であり、その語の持つ多義性が研究の起点ともなりえている場合が多いのである。さらに言えば、ルソー自身もこうした用語をむしろ意図的に曖昧に用いる傾向があり、自らもそのことを述べているのである。このような用語のひとつがこの小論において論じる *rapport* という語であり、ルソーの著作において多義的に曖昧に用いられているのである<sup>3)</sup>。

複数の領域を横断して用いられている語は、ルソーの著作には他にもいくつか指摘できる<sup>4)</sup>。こうした用語の横断性の研究に関しては、ルソー研究史において、いくつもの領域に大量のテキストを残しているこの思想家、作家についてある種の統一的な像を見出そうという研究の傾向があったのは事実である。われわれの小論において、上記に引用した *rapport* という用語をとりあげ、いくつかの領域、化学、教育、政治といったような領域でどのようなコンテキストで用いられているか、そしてその意味論的な共通性や齟齬につい

て確認し論じてゆくことにしたい。

## 2. 化学論における関連性 rapport あるいは「親和力」

さて、われわれはこの rapport という語への接近をまず化学の領域の意味から始めてゆきたい。というのも、一般的に関係とか関連などのように訳されるこの語は、化学用語として用いられる際に18世紀特有の特殊な意味合いを帯びることになるからである。『化学教程』の一節における rapport という用語についての次のような化学論の説明文を見てみよう。

沈殿作用について正当な観念を作り上げるには、物質の間の関連性 rapports を考慮して、これら物質がもつ除去しあう性質や新たな結合を作り出す性質を考察する必要がある。打ち明けて言えば、この関連性 rapports という語は曖昧な用語で、理論やこの結合の初歩的な法則さえも説明するのに役立つ機能的なことについてはなにも言い表していない。しかし、そうだからこそわれわれはこの用語を使うことを余儀なくされている。というのも、用語を空虚な意味にしないために、技術用語はみなが知っている観念や獲得した知識だけが言い表される必要がある。しかし、われわれは様々な物質がその間で結合できるということを知っている、この結合がどのやっとなされるのか、その本当の原理とはいかなるものかについて全く知らないのだ。したがって、われわれはこの性質が、親和性 affinité とか関連性 rapports という一般的な名称で言い表され、その意味もわれわれが現実を知っていること以上のものではない、というところで満足しなければならない。このような特性は様々な物質に関して多様な力を伴って作用することを認めてみよう。われわれは多様な関係性をうちたてるが、その(要素を)比較することで、もしわれわれが真の原理を知るならば、関係性から同じ部分を取り出すために必要なあらゆる光がわれわれに与えられることだろう<sup>5)</sup>。(下線は筆者)

ここにおいて、化学反応が生じる物質どうしの「関連性」 rapport という用語を、ルソー言うところに従えば、意図的に「曖昧に」用いたことが述べられている。その理由は化合が可能な二つの物質の間にあるなにかしら未知の関連性を意味する語として必要とされている、というのである。この引用部の主旨は明確であり、重要な点は、ルソー自身がこの用語の曖昧さをむしろ積極的に肯定して説明していることにある。この点に、ルソーの語彙や概念の使用法の特徴をみることはできるだろう。化学という領域は18世紀において最先端の科学の分野ではあったが、まだ発展途上であり具体的にどのような物質と物質が化合しうのか、すなわち、化学反応の種類の全体像がまだ把握されていなかったのである。したがって、ルソーはそうした未知の化学的結合、化学反応の可能性を考慮して、むしろ rapport の意味の曖昧さがあることがこの語の使用の必然性となっていることを説明している。このことは、rapport の意味が他の多様な分野でやはり曖昧に多義的な意味に用いられるだろうことを示唆してはいないだろうか。化学論において未知の領分があるならば、他の分野においても事情はさほどかわらないと予測することができるからである。

さて『化学教程』において rapport は主に関連性という曖昧な意味であると同時に「親和

性」といったこう言ってよければ、特殊化学的な意味としても用いられている。親和性は、当時の科学史的な背景でいえば、ルソーのオリジナルな意味や表現では決してなく<sup>6)</sup>、彼が『化学教程』を著す際に参照したものにも明らかに記され、当時の化学者たちに共有されていた化学的コンセプトであった。例えば、『百科全書』において、化学用語としての *rapport* の項目には次のように記されている。

**関連性あるいは親和性(*Rapport ou Affinité*)** (化学用語)、化学者たちはこの語によって不特定の物質が化学的に結合して他の不特定の物質になる傾向を言い表している。例えば、酸とアルカリについて、それらの間で化学的結合がありうるならば、それらの間に関連性 *rapport* あるいは親和性 *affinité* があると言う<sup>7)</sup>。

化学反応にみられる複数の物質の結合性＝親和性の意味で *rapport* という用語が一般的に使われていたことは重要であり、ルソー自身もこの語が意味論的に曖昧であると同時に最先端の「科学的な真理」に近いということをよく知ってうえて、『化学教程』において用いていたと言えるだろう<sup>8)</sup>。

前世紀の科学的発見であるニュートン力学などの物理学がまだ科学史上の主要なパラダイムとなっていない時代、化学は時代の最先端の科学分野であった。ニュートンにより発見された万有引力の法則も、ともすると化学的に解釈されていたのである。実際、ニュートン学派という化学者達たちが存在し、彼らは化学的な反応を起こす物質どうしの親和性を万有引力から説明しようとした<sup>9)</sup>。つまり、物体のもつ引力とは、物質どうしの間に引き付けあう性質、親和性あるいは親和力のようなものが作用しているのだ、といった解釈である。ルソー自身の『化学教程』によればニュートンの引力論は次のように説明されている。

ニュートンは引力によって物質の溶解を説明するのだが、その最初の発想を化学的な実験から得たことは疑いようもない。彼の説明は簡単である。もし、溶解する物体の諸部分を結びつける引力が溶解する要素の引き合う力よりも小さいならば、凝集力が負け溶解するのである。もし、凝集力が引力より大きいならば、溶解は起こりえない。

10)

ルソーは『化学教程』においてこうしたニュートン派化学者達の説を取り入れて化学反応などを以上のように説明している。ルソーの時代の少し後に、当時のドイツ・ワイマール公国の文学者が『親和力』<sup>11)</sup>という小説を刊行したのも、こうした化学的用語から発想をえたものであり、そのことから当時18世紀の科学(化学)的パラダイムの存在とその影響力が垣間見えるだろう。そのパラダイムの中心には化学的親和性 *affinité chimique* の理論があったことは確かである。

そうした領域横断的な影響力のもとに化学的親和性の原理を用いていた哲学者として知られているのがディドロである。特にディドロの著作活動の後期において書かれた『ダランベールの夢』や『ラモアの甥』に登場する人物たちは物質どうしが化学反応を起こしたかのように化学的親和性のもとに影響しあっていると解釈されている<sup>12)</sup>。ディドロもルソ



一同様に当時の化学的知識や方法を学んでいた哲学者の一人であり、その研究史においては従来から化学的な思考の影響があると指摘されてきていた。ルソーにおいては、化学的な思考や用語が表立って現れることがなく、この視点からの解釈が他の分野における研究に比してかなり少なかったことは事実である。

科学史の観点から言えば、18世紀において、化学中心的パラダイムが歴として存在し、あるいはフーコー的に言えば、化学中心的エピステーメがありえた時代にルソーの思想、哲学、政治論を置きなおしてみる必要性は十分に確認できるだろう。ただし、『化学教程』自体が書かれた1747年とルソーの主要な著作が書かれる1750年代末から60年代にかけて長い空白期間があり、なぜルソーが化学的方法なり態度を維持しなかったあるいは抑圧したのか、という疑問については議論の余地が大いに残されている。この空白期間の後に、*rapport* という語もあたかもその化学的な意味が忘れられたかのように、他の著作に用いられることになってゆくのである。

### 3. 『エミール』における *rapport*

ルソーはこの化学的意味をもった *rapport* を他の60年代の著作において用いている。例えば、『エミール』において、ワインに混入される一酸化鉛（蜜陀僧）を発見する方法に関して生徒エミールに化学の講義を行うようなコンテキストに化学用語としての *rapport* を用いている。

酸は金属物質と関係性(*rapport*)があり、溶解して金属物質と結合して、合成塩を作る。たとえば、錆は空気や水に含まれる酸によって鉄が溶解したものにほかならないし、緑錆とは酢によって銅が溶解したものにほかならない。しかし、この同じ酸は、金属物質よりもアルカリ物質に対してより多くの関係性(*rapports*)を持っているので、先ほどお話しした合成塩にアルカリ物質が干渉すると、酸は金属から引き離されてアルカリとくっつく。<sup>13)</sup>

化学をエミールに教えるというコンテキストで用いられる化学的な関係性・親和性の用語は、このように日常的なコンテキストにおいて、なんらの専門用語としての注釈もなく使用されている。しかし、次のような『エミール』に特有であるともいえる「人間と物自体」との *rapport* に関する文章においては、明らかに異なった意味として、しかし、化学的用語ととりたてて区別されることなくある種の曖昧さのうちに述べられているのである。

現実の諸関係(*des rapports réels*)に基づいてのみ観念を形成する精神は堅実な精神である。外見だけの諸関係(*des rapports apparents*)で満足する精神は浅はかな精神である。関係(*rapports*)をあるがままに見る精神は正しい精神である。関係の評価を見誤る精神は正しくない精神である。現実にも外見的にも存在しない架空の関係(*des rapports imaginaires*)をでっちあげる精神は狂人である。なんら比較しようとなしない精神は愚か者である。観念を比較し関係(*des rapports*)を発見する能力が大きい小さいかによって、人間のもつ精神が大きい小さいかを決まるのだ<sup>14)</sup>。

この一節に限らず、『エミール』においてルソーは、きわめて頻繁に「関係」*rapport* について言及している。例えば、第三巻においてエミールに与える最初の書物としてダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』を持ち出してくる際に、エミールが行うこととして次のように述べる。「先入見を超え、ものごとの真の関係 *les vrais rapports des choses* について判断を与えるもっとも確実な手段は、一人取り残された人物の立場に自分の身を置き、有用性についてこの男が自分自身でそう判断しなければならないのと同じようにすべてについて判断することである。」<sup>15)</sup> このように、対象を観察し比較することで「ものごとの真の関係」(*les vrais rapports des choses*)を見出す<sup>16)</sup>ことこそが本来の人間の思考であると述べられている。このような意味で『エミール』はまさしく「関係の概論書」(*un traité des rapports*)とさえ称される<sup>17)</sup>。すなわち、人間の発達過程における初期段階では子供と事物(*les choses*)との関係がテーマとなり、次の段階には子供の人間との関係が、そして「道徳的關係」、「市民的關係」がテーマとなってエミールへの教育は段階的に進展してゆくのである<sup>18)</sup>。

『エミール』における、こうした *rapport* のあり方は人間の社会的な「関係」の意味として、あるいは「もの」の関係として、曖昧に多義的に用いられている。この点で *rapport* を単なるスタティックで外的な「関係」(*relation*)にとらえるか、それとも二つの要素が引き合っただイナミックな化学反応を起こしうのような内的な親和性にとらえるかで全くことなる意味合いを持つてくるだろう。*rapport* のこうした意味を区別する指標はほとんどなく、ただ文脈に即して受け取るのみであるのだが、ルソー自身がむしろそうした意味作用の混交を目論んでいたと解釈することも可能であろう。なぜなら、上記の『化学教程』からの引用にあったように、*rapport* の使用に曖昧さを残すことで未知の反応の可能性に間口を開いていることがありうるからである。

人間的な関係のある種の化学反応として考えられるならば、最も象徴的な関係は、男女の恋愛にいわれるような情動的な人間の *rapport* である。人間どうしの間での引き合う力、すなわち、ルソーの小説『新エロイズ』に描かれるような男女の愛、情念のような概念にも人間どうしが引き合う力としての親和性 *rapport=affinité* を想定していたと解釈できる。次のような『新エロイズ』の一節では、ジュリーが長々と説教をする場面で *rapport* が一種化学的な意味合いを帯びてくることがありえはしないだろうか。

官能的な愛は肉体的所有なしにはすまされず、またそれによって消えてしまいます。  
真実の愛は心なしにはすまされないし、それを生じさせた関係 *rapports* がある限り持続するのです<sup>19)</sup>。

ここでいう男女の愛情関係は *rapport* が *affinité* 親和性という意味をも持つと理解できた瞬間に納得できるものとなるだろう。人間どうしの関係や社会関係の予期せぬ変化を化学的に説明するという、今日でも用いられる比喩的言い回しの起源は、この時代における物質の化学的反応や溶解という発見に起因していると言っても過言ではない。18世紀啓蒙主義時代の哲学者、文学者たちにとって化学的親和性 *affinité chimique* という「科学的真理」はとりもなおさず人間の間での引力を説明する原理でもあったのだろう。『エミール』に何度となく述べられている *rapport* においても、『新エロイズ』の例にあるような情動的な化学変化を起こす可能性の意味を含みひそませていたとしても不思議ではないだろう。

**rapport** という語は現在も当時も多義的な意味をもって用いられているがゆえに、以上のような解釈を可能にしているのである<sup>20</sup>。それは、ある意味ではルソー自身の言葉を用いた戦略ではないだろうか。そもそもは、化学論のコンテクストにあったように自然における現象の原理を知り尽くしてはいないからこそむしろ曖昧な言葉を用いる、と述べていた。しかし、その実は、**rapport** の多義性を積極的に利用して一義的な意味以上のことを読解させようとしていたのではないだろうか。

#### 4. 政治哲学における関係性と比率

ルソーの政治学的著作に用いられている **rapport** は、上記のような化学的な意味ではなく、数学的な「比率」という意味で用いられることがむしろ多い。これは、ルソーの音楽論においても、音楽の原理論的に援用される表現でもあるが、ここでは政治哲学の領域にとどめておこう。たとえば、『社会契約論』では、**rapport** は次のように国家サイズを比較する比率の意味で用いられている。

国家が1万人の市民で構成されていると想定してみよう。主権者は集合的で総体としてだけ考えられる。しかし、国民(臣民)という資格の個々は個人として考えられる。かくして、主権者が国民(臣民)に対しての比率は1万対1の関係である。つまり、国家の一構成員は主権者の1万分の1しか分け前をもっていないにも拘らず、主権者に全面的に従っているのである。人民が10万人であると想定しても、国民(臣民)たちの状態に変化はなく、個々は全く法により支配されるが、個々の投票は10万分の1に縮小され、(法の)起草において前の10分の1の影響しか持たない。そこで、国民(臣民)は常にひとりであるが、主権者の比率(**rapport**)は市民の数に比例して増大するのである。したがって、国家が大きくなればそれだけ自由は減少することになる。わたしが、比率(**rapport**)が増大すると言うのは、比率が平等性から遠ざかるという意味である。このように、幾何学的意味で比率(**rapport**)が大きくなればなるほど、一般的な意味では関係性(**rapport**)が減少する。前者の意味では、比率(**rapport**)は量にしたがって考えられ、指数によって測定されるが、後者の意味で、関係性(**rapport**)は個人にしたがって考えられ類似性によって評価される。<sup>21)</sup>

ここでルソーは、国民が国家の主権者を構成すること、そして主権者において個人は国家に対して主権者の決定権は比例的な割合に従って全体の一部分にしかならないことを述べている。**rapport** はここで、数学的な意味あいでは「比率」であるが、その一方で一般的な意味においては「関係性」、あるいは「類似性」の意味となることが指摘されている。**rapport** はここにおいてもやはり曖昧で両義的であり、しかも複数の意味が相反するだろう傾向に関してルソー自身が述べている。

しかしながら、『社会契約論』の中核をなす概念に関してこの「関係」という概念が現れてくると比率というのではなく社会的な関係の意味合いを持つようになる。次の『社会契約論』のジュネーブ草稿と呼ばれる最初の一節を見ていただきたい。

ずいぶん多くの高名な著者が、統治の諸格言と市民法の諸原則について論じてきたの

で、この主題について、これまでにかたられていないような有益な発言をする余地はまったくない。しかし、もし、はじめに社会体(*corps social*)の本質をもっとよく規定しておいたならば、おそらく、いまよりもっとよく意見が一致していたことであろう。またおそらく、社会体の最良の関係(*rappports*)がもっとはっきり定められていたことであろう。<sup>22)</sup>

「社会（共同）体」(*corps social*)内部の最良の「関係」とは何を意味するのか。このことに関しては『法の精神』の著者であるモンテスキューの影響であるという指摘がある<sup>23)</sup>。詳細についてはここでは論じられないが、*rapport* で指示されている社会的「関係」とは少なくともルソーにとっては当時の政治体制の批判されるべき即物的な「関係」であり、何かしらの変化が生じるような化学的な *rapport*（親和性）とは、それこそ関係がなさそうである。

しかし、この関係の枠組みは、単なる一元的な *rapport* ではなく多層的な「二重の関係」(*double rapport*)として表現されるとき、固定されていた関係が相対化されるという変化を見せることになる。

この書式からわかることは、原初的な同盟の行為は公的な人格と特殊な人格たちとの相互の約束を内包していること、そして各個人は、いわば自分自身と契約することで、二重の関係(*rapport*)のもとに参加するということである。すなわち、特殊な人格に対する主権者の構成員として、そして主権者に対する国家の構成員としてなのである。

<sup>24)</sup>

「いわば自分自身と契約する」という、従来の自然法学者や社会契約説に見られる主従契約の関係を批判する、きわめてルソー的な契約「関係」がここに述べられている。ただし、ここにおいても *rapport* はスタティックな「関係」を意味する言葉としてしかない。政治哲学という領分では *rapport* は化学反応を起こす親和性、そしてなんらかの変化のカテゴリーには属さない語彙であるようだ。

*rapport* という枠組みを破壊し新たな「関係」を作り出す作用について、ルソーはこの *rapport* という語を用いずに新たな表現を用いている。それはより緊密な結びつきの関係を意味する「結合」(*liaison*)である。

もし一般社会が哲学者の体系の外に実在するとするならば、それは、わたしが既に述べたように、一個の精神的存在(*un être moral*)であって、この社会を構成する個々の存在とははっきり区別された固有の性質を持つであろう。そのことは、化合物(*composés chimiques*)が、その構成物質のたんなる混合からは決して出てこないような属性を持つのと、ほとんど同様である。この社会には自然がすべての人間に教えた普遍的な言語があって、これが、彼らの相互の交渉の最初の道具となるだろう。そこでは、すべての部分の交感に役立つ一種の共感覚器官があるだろう。公共の幸福あるいは不幸は、単純な加算の場合のように、個々の幸福あるいは不幸の総和にとどまるのではなく、それらの「(結び付けている)関係」(*liaison*)のうちにあり、この総和よりも大きいであ



ろう。だから、公共の福祉は、個々人の幸福の上に成り立つものであるどころか、まさにこれらの幸福の源泉なのである<sup>25)</sup>。

ここにみられるのは、化学的な物質の結合＝関係として表現されるものこそが公共の幸福に他ならないということである。関係という概念は、ここにおいて化学物質の親和性(rapport=affinité)ではなく、物質の化学的結合関係をモデルとする「結びつきの関係」(liaison)として示されている。ベルナルディはこの一節にルソーの化学的なメタファーのあり方と一般意志の形成が基づいている加算モデルと結合モデルの対立を見ている<sup>26)</sup>。われわれはさらにここにおいてルソーの関係(rapport)の概念の変容、つまりは、rapport=affinitéという化学的親和性からの発展的である化学的結合の表現(liaison)を見出せると考える。それこそが、物質どうしの「結合」を意味し、国家の内での要素や個々人の結びつきを意味する liaison であり、言いかえるならば、先に述べたベルナルディの指摘にあった「結合」と「結社」を意味する association への関係概念の変容なのではないのだろうか。

## 5. 結び

この小論において、『化学教程』というルソーの化学論の文章や表現から他の分野の著作を読む試みを rapport という化学的親和性を表す語の観点から行ってきた。そこで、化学的発想による物質どうしの親和性という、二つの要素が引き付き合い化合する現象が、もう一つの rapport の意味としてある関係性という意味と交錯して用いられているということが見出された。

こうした考察を可能にしたのは、共通の rapport という語が多義的に多様な領野で用いられしかもそれぞれの分野において重要な概念としてみなされているからである。領域横断的な語彙の使用というのは、その語の意味が一義的に、あるいは一分野のみにおいて決定されていないから可能であるとみることもできる。言葉の多義的な使用、これは自然科学というよりはむしろ人文科学において頻繁に見られる現象である。ルソーの『言語起源論』にあるように、言葉は、固有の意味、すなわち、一義の意味で使用されるよりも、比喩の意味、コノテーションが複数ありメタファーに富んだものの方が言語の本来の使用法なのかもしれない。ルソーの政治学におけるメタファーを多用した考察はルソーの人文科学的センスなしにはありえないとは言えないだろうか。

さて、rapport という語の多義性を鑑みると、更にルソーの音楽論の領域での「比率」という音楽論的であると同時に数学的なタームについても考察を広げなければならない。この点に関しては今後の課題として考えてゆくこととして、とりあえずは化学論から政治哲学にかけての「関係」概念の変化を以上のように確認したことで良しとして、われわれはこの小論を終えたいと考える。

## 参考文献

・ルソーの著作からの引用と翻訳

本文中に引用されたルソーの文章はすべてルソー生誕 300 年を記念して編集刊行された Slatkine Honoré-Champion 版の『ルソー全集』全 24 巻 *Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau*, (Slatkine Honoré-Champion) 24 tomes からのものであり、また日本語訳は白水社版の『ルソー全集』小林善彦・樋口

謹一監修、1978-1984 年を参考に私訳を行い本文中に用いた。

・研究参考文献

Bernardi, Bruno, *La fabrique des concepts*, Honoré-Champion, 2006.

Bernardi, Bruno, « Référents scientifiques et invention conceptuelle » dans *Rousseau et les sciences*, B. Bensaude-Vincent et B. Bernardi (dir), Paris, L'Harmattan, 2003.

Bernardi, Bruno, « Pourquoi la chimie ? Le cas Rousseau » dans *Dix-Huitième siècle*, n.42, 2010.

ベルナルディ、ブリュノ、『ジャン＝ジャック・ルソーの政治哲学——一般意志・人民主権・共和国』、三浦信孝他訳、勁草書房、2014 年。

Bensaude-Vincent, Bernadette et Bernardi, Bruno, « Rousseau chimiste » dans *Rousseau et les sciences*, 2003.

Charrak, André, « Descartes et Rousseau », in *Rousseau et la philosophie*, Publication de la Sorbonne, 2004.

Charrak, André, « Le versant physique de la musique selon Rousseau », in *Rousseau et les sciences*, 2003.

Charrak, André, *Contingence et nécessité des lois de la nature au XVIIIe siècle*, Vrin, 2006.

Charrak, André, *Rousseau de l'empirisme à l'expérience*, Vrin, 2013.

Lefebvre, Frédéric, « Proportion, finalité, affinité : la notion de rapport chez Rousseau », in *Rousseau et la philosophie*, Publication de la Sorbonne, 2004.

淵田 仁、「化学」を巡るフィロゾフたちの戦い——ルソーを中心にして——、『百科全書』・啓蒙研究論集 1 号所収、2012 年。

Kawamura, Fumie, *Diderot et la chimie*, Classique Garnier, 2013.

クーン、トマス (Kuhn, Thomas)、『科学革命の構造』、中山茂訳、みすず書房、1971 年。

Lay Williams, David, *Rousseau's Platonic Enlightenment*, The Pennsylvania State University Press, 2007.

Pépin, François, « L'Epistémologie empiriste et la critique du matérialisme dans les *Institutions chimiques* » dans *Philosophie de Rousseau*, Classique Garnier, 2014.

佐藤淳二、「ルソーの思想圏」、現代思想 2012 年 10 月号特集ルソー所収、青土社、2012 年。

Riley, Patrick, *The General Will Before Rousseau*, Princeton University Press, 1986.

Riley, Patrick, *The Cambridge Companion to Rousseau*, Cambridge University Press, 2001.

## 注

<sup>1)</sup> Cf. Bernardi, Bruno, *La fabrique des concepts*, Honoré-Champion, 2006.

<sup>2)</sup> Cf. Starobinski, Jean, *La transparence et l'obstacle*, Gallimard, 1976.

<sup>3)</sup> Cf. Lefebvre, Frédéric, « Proportion, finalité, affinité : la notion de rapport chez Rousseau », in *Rousseau et la philosophie*, Publication de la Sorbonne, 2004.

<sup>4)</sup> たとえば、intérêt という語は関心という意味を持つと同時に利益という意味もあり、18 世紀においては美学と政治学においてそれぞれ重要な概念となっていた。熊本哲也「ルソーの音楽美学における関心とイリュージョンについて」岩手県立大学共通教育センター紀要「リベラル・アーツ」第 7 号を参照されたい。

<sup>5)</sup> ジャン＝ジャック・ルソー『化学教程』Jean-Jacques Rousseau, *Institutions chimiques* in *Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau*, (Slatkine Honoré-Champion) Tome X, *Ecrits Scientifiques*, pp.404-405.

<sup>6)</sup> ルソーが『化学教程』を書くときに参照したのは当時の化学の入門書としてあったヘルマン・ブールハーフェ Herman Boerhaav の『化学実験教程』*Institutiones et experimenta chemiae* (1724)やヴォーゲルの『化学教程』*Institutiones Chemiae* (1755)などから内容も題名も借りていたことが分かっている。Cf. Bernadette

Bensaude-Vencent, et Bruno Bernardi « Rousseau chimiste » dans *Rousseau et les sciences*, p.68.

7) 百科全書』項目「関係」<rapport>, *Encyclopédie ou Dictionnaire Raisonné des Sciences des Arts et des Métiers*.1751-1780.

8) 実際のところ、『百科全書』の項目 rapport を含む巻の刊行は『化学教程』の執筆時期よりも後のことであり、ルソーが『百科全書』に触発されたという意味ではない。

9) Cf. Fumie Kawamura, *Diderot et la chimie*, Classique Garnier, 2013.

10) *Ibid.*, p.436.

11) ゲーテ、フォン・ヨハン・ヴォルフガング Goethe, (von) Johann Wolfgang, 『親和力』 *Die Wahlverwandtschaften*, 柴田翔訳、講談社文芸文庫、1997 年

12) *Op.cit.*, Kawamura,

13) 『エミール』第三巻、*Emile ou de l'éducation* III in *Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau*, Tome VII, p.544.

14) *Ibid.*, p.579.

15) *Ibid.*, p.548.

16) 『エミール』のファール草稿では、『エミール』本編での表現「ものごとの真の関係」(les vrais rapports des choses)は単に「ものごとの真実」(la vérité des choses)となっている。草稿から本編への過程で rapport の観念が付加されたことは興味深い事実である。Cf. *Emile* (Manuscrit Favre) in *Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau*, Tome VII, p.221.

17) *Op.cit.*, Frédéric Lefebvre, « Proportion, finalité, affinité : la notion de rapport chez Rousseau » in *Rousseau et la philosophie*, p.32, Publication de Sorbonne, 2004.

18) *Ibid.*, p.32.

19) *La Nouvelle Héloïse*, in *Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau*, Tome XV, pp.627-628. «L'amour sensuel ne peut se passer de la possession, et s'éteint par elle. Le véritable amour ne peut se passer du cœur, et dure autant que les rapports qui l'ont fait naître.»

20) rapport という語についていかなる辞書でも 10 個程度の意味の項目があり、17-18 世紀フランスで定評があったフリュティエール辞典 *Dictionnaire de Furetière* の場合でもそうであった。Cf. *Op.cit.*, F. Lefebvre, p.33.

21) *Du Contrat social* III, in *Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau*, Tome V, pp.528-529.

22) 『社会契約論』(ジュネーブ草稿)、*Du Contrat social ou essai sur la forme de la république* I, in *Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau*, Tome V, p.375.

23) 全集版のジュネーブ草稿に対して Simone Goyard-Fabre が付した注には、この文脈での rapport という語には確かにモンテスキューの影響が見受けられると述べられている。注によると、ルソーはモンテスキューのように人間存在を構成するものとしての「関係」に重要性を見るのではなく、関係の脆弱性やそれが生み出す当時の「悲惨さ」を見た指摘されている。Cf. *Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau*, Tome V, p.377, note 4.

24) *Ibid.*, p.387.

25) *Ibid.*, pp.380-381.

26) ブリュノ・ベルナルディ、『ジャン＝ジャック・ルソーの政治哲学——一般意志・人民主権・共和国』、特に第二章『エコノミー・ポリティック論』における<一般意志>概念の形成、三浦信孝訳編、勁草書房、2014 年、p.55。